

# 令和5年度 北浦中学校 校内研究

## 「自らの考えをもち、表現する力を育成する学習指導の在り方」

— 評価からの授業改善を通して —

### 主題設定の理由

平成29年3月、中学校学習指導要領が改訂され、生徒が未来を切り拓くために必要な資質・能力を確実に育むことができるよう、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養の3つの柱に基づき、各教科等の目標や内容が見直され、今後の授業改善の視点が示された。昨年度から完全実施となり、「主体的・対話的で深い学び」の確実な実践が求められている。

本校生徒は、素直で穏やかな生徒が多い一方、自己有用感、自己肯定感が乏しい生徒、自分で未来を切り拓く主体性が低い生徒も少なくない。昨年度の実態調査では、「自分には良いところがある」に肯定的な回答をした生徒は約8割弱であり、学校ブランドデザイン目標を達することができなかった。また、学習面では、約9割の生徒が「授業の内容がわかると思う」と回答し、約8割の生徒が「課題に対して、自分なりに考え、追求することができていると思う」に対し肯定的な回答をしているが、普段の授業の中でも、友達の前で自分の考えや意見を発表すること、授業等で自分の考えを他者に表現することを苦手としている生徒も多い。また、客観的テストの分析から、文章や図表から必要な情報を見つけたり、それらを関連付けて自分の考えを表現したりすることも課題となっている。

このような社会的な背景や生徒の実態を踏まえ、本主題を設定した。

### 研究のねらい

全教科による「北浦中授業スタイル」に基づく共通実践を通して、自らの考えをもち、表現する力を育成する学習指導の在り方を究明する。本校の大切にしたい授業の視点は、

1. 主体的な学び…教師の出どころを精査し、生徒が自らの課題を解決することを通して、分かる喜びや楽しさを実感すること
2. 思考力・判断力・表現力…文章や資料から必要な情報を見つけたり、それらを関連付けて表現したりする場面を意図的に設定することとする。

### 研究の見通しと研究の内容

RPDCAサイクルによる授業研究のシステムを構築する。目指す授業像は、教師の言葉を極力少なくし、子どもが主体的に活動し成長する授業である。また、主体的・対話的で深い学びに向けた授業を実践するため、授業後の生徒の姿をもとに、評価を切り口とした校内研究を実践する。

[・評価からの授業改善 ・全体研究 ・個人研究 ・事前研究 ・事後研究]

学ぶ意義や自己のキャリア形成の方向性と関連付け、自らの考えを広げ深める生徒を育成するため、単元や1単位時間を見通して「北浦中授業スタイル」による課題解決的な学習を実践する。また、「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現していくために、ICT活用を組織的に進めていく見通しを全教職員で共有する。

[・北浦中授業スタイル ・北浦中スタンダード ・単元で目指す姿の見通し ・効果的な振り返りの実践 ・指導に生かす評価の工夫 ・ICTの活用 ・課題を明確にした小グループでの話し合い活動 ・学校独自の記述問題の実施と分析]

基礎的・基本的な知識及び技能の習得とそれらを活用する思考力・判断力・表現力等を育成するため、教育課程の工夫、生活習慣の見直し、家庭学習の習慣化を図るための手立てを工夫する。

[・計画的な学び直し ・朝学習を利用した記述問題への取組 ・個に応じた家庭学習の指導 ・ライフスタイルチェックのデータを踏まえた面談(養護教諭、栄養教諭)や保護者との連携 ・家庭学習面談]

### 研究計画(別紙)

### 検証方法

・授業後の生徒の姿(評価物)の分析  
・客観的テストにおける結果の分析  
・学校生活アンケート(生徒・保護者)

・研究授業における評価の分析  
・学校独自の記述問題の結果分析  
・授業者セルフチェックによる教職員の意識調査

### 成果

・課題解決型学習の実践の積み重ねにより、授業内における個別最適な学び、協働的な学びを推進することができた。  
・全国学力・学習状況調査や学力診断のためのテストの結果分析や、研究授業後の研究協議における課題について組織的に共有し、授業へとフィードバックすることができた。

### 課題

・資料から情報を適切に読み取り、それらを関連付けて表現する力  
・基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けた学び直しの習慣化(家庭学習の推進を含む)  
・授業内における教師の出どころの精査、教師主導からの脱却  
・生徒自身によるICTの効果的な活用

### 研究のまとめ

生徒アンケートによると、「授業がよくわかる」への肯定的回答が94.3%、「課題に対して自分なりに考え、追求することができる」への肯定的回答が90.5%、「友達と考えを伝え合う活動の中で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」への肯定的回答が94.2%と、授業の中で「個別最適な学び」、「協働的な学び」の推進を図ったことによる一定の成果がみられたものと考えられる。一方、全国学力・学習状況調査や県学力診断のためのテストの結果から、問題文および資料から情報を読み取り、それらを関連付けて表現する力や、基礎的・基本的な知識・技能の定着に課題があることがわかった。つまり、生徒の意識と身に付いている学力に乖離が見られるということである。

本校で「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し「主体的・対話的で深い学び」を確実に実現させるために、生徒の特性や学習進度に応じた授業構想とそれを形にするためのICT活用、集団の中で個の考えが生かせるように、生徒が多様な他者と協働しながら学ぶ場の設定等が求められている。また、これらの実現のために、各教科、各単元、各時間における生徒一人一人を適切に評価し、指導にフィードバックさせる「評価と指導の一体化」についての研究をすすめる必要があると考えられる。